

次の短歌を読んで、問い合わせに答えなさい。

A ①湧きいづる泉の水の盛りあがりくづるとすれやなほ盛りあがる

窪田空穂

B いづくにか父の声きこゆこの古き大きな家の秋のゆふべに

若山牧水

C 楽章の絶えし刹那の明るさよふるさとは春の雪解なるべし

馬場あき子

D せめてわが自由になるものを自由にせむ、自由なるものの②三つか二つを

土岐善磨

(注) 刹那——きわめて短い時間。瞬間。
雪解——雪が解けること。雪どけ。

問一 —— 線①「湧きいづる泉の水」とありますか、これはどのような動きをしていますか。次の文の□にあてはまる言葉を書きなさい。

・ □動きをしている。

❶直後の部分に注目する。(例) 盛り上がりくずれかけては、また盛り上がる

問二 B・Cの短歌の句切れを、ア～オからそれぞれ選びなさい。

ア 初句切れ イ 二句切れ ウ 三句切れ

エ 四句切れ オ 句切れなし

❷句切れは用言・助動詞の終止形や終助詞に注目する。Bは「きこゆ」が動詞の終止形である。Cは「よ」が終助詞である。

問三 B・Cの短歌の鑑賞文として最も適当なものを、ア～オからそれぞれ選びなさい。

ア 家族と故郷で過ごす時間をしみじみといとおしむ気持ちが感じられる。
イ 故郷で聴いた楽曲に思いをはせ、春までには帰りたいと思っている。
ウ 亡くなつた家族の面影を家の中に感じて、悲しみをかみしめている。
エ 静かさの中に孤独を感じ、故郷に戻りたいと切実に願っている。

オ 一瞬感じた明るい気持ちに、故郷の春の情景を重ね合わせている。

❸Bは「いづくにか父の声きこゆ」」「亡くなつた家族の面影を家の中に感じて」、Cは「刹那の明るさよ」」「一瞬感じた明るい気持ち」が対応している。

問四 —— 線②「三つか二つを」のあとに省略されている言葉を、短歌の中から書きぬきなさい。

自由にせむ

B
ウ

C
オ

B
イ

C
ウ

次の文章を読んで、問い合わせに答えなさい。

「僕」は自分のことを、全くとりえもなく、人好きもしない生徒だと思つてゐる。ある日「僕」は、サーラスのテンントの陰に、瘦せて背骨のへこんだ痛々しい馬がつながれてゐるのを目撃する。「僕」にはその馬が、自分と同じように、(まあいいや、どうだつて。)とつぶやいているように思えた。

靖国神社の見せ物小屋の周りをぶらつくことにして、もう、その頃の僕らの年頃では、いんちきに決まつて、いろいろ首のお化けや、拳闘対柔道の大試合なんかにたいした興味はない。お祭りで学校が休みになれば、^①気のきいた連中は日比谷か新宿へレビューか映画を見に行つてしまつた。僕たて、どうせ遊ぶのならそつちの方がいいに決まつてゐると思うのだ。けれども僕はなんといふこともなしに境内をあちらこちら人波にもまれながら歩いていた。

だからその日、僕がサーラスの小屋へ入つて、いつたのも別段、何の理由もなかつたのだ。僕はむしろ敷きの床の上に、汚れた湿っぽい座ぶとんを敷いて、熊の相撲や少女の綱渡りなど同じようなことが果てもなく続く芸当を、ぼんやり眺めていた。が、ふと場内を見渡しながら僕は、はつとして目を見張つた。……あの馬が見物客の真ん中に引つ張り出されてくるのだ。^②僕は団長の親方が憎らしくなつた。いくら、ただ食べさせておくのがもつたいないからといって、なにもあんなになつた馬を見せ物にしなくたつていいじゃないか。

馬は、ピロードの金モールの縫い取りのある服を着た男にくつわを引かれながら、申しわけなさそうに下を向いて、あの曲がった背骨をがくがく揺すぶりながらやつて来る。くらも着けずに、今にも針金細工の籠のような胸とお尻とが、ばらばらに離れてしまいそうな歩き方だ。しかし、どうしたことか彼が場内をひと回りするうちに、急に楽隊の音が大きく鳴りだした。と、見ていて馬はどことこと走りだした。

^③周りの人は皆、目を見張つた。楽隊がテンポの速い音楽をやりだすと、馬は勢いよく駆けだしたからだ。すると高いボーグの上に上がつて、いた曲芸師が、馬の背中に——ちょうどあの弓なりにへこんだ所に——飛びついた。拍手が起つた。驚いたことに馬はこのサーラス一座の花形だつたのだ。人間を乗せると彼は見違えるほど生き生きした。馬本来の勇ましい活発な動作、その上に長年鍛え抜いた巧みな曲芸を見せ始めた。楽隊の音につれてダンスしたり、片側の足で拍子を取るようすに奇妙な歩き方をしたり、後ろ足をそろえて台の上に立ち上がつたり……。いつたいこれはなんとしたことだらう。あまりのことによく僕はしばらくあつけてとられていた。けれども、思い違いがはつきりしてくるにつれて僕の気持ちは明るくなつた。

息をつめて見守つていた馬が、今火の輪くぐりをやり終わつて、やぐらのよう組み上げた三人の少女を背中に乗せて、悠々と駆け回つてゐるのを見ると、僕は我に返つて^④一生懸命手をたたいている自分に気がついた。

(注) 拳闘——ボクシング。 レビュー——歌と踊りを主体としたショー。

ピロード——織り方の一つ。なめらかでつやのある織り方。

問一 線①「気のきいた連中は日比谷か新宿へレビューか映画を見に行つてしまつた」とあります。

理由を述べた次の文の□ A・Bにあてはまる言葉を、文中から二字以上五字以内でそれぞれ書きぬきなさい。

・見せ物小屋は、□ Aに決まつているものや、たいして□ Bのないものをやつていたから。

●直前の文に注目する。

問二 線②「僕は団長の親方が憎らしくなつた」とありますが、それはどのような様子を見たからですか。

ア 何の芸もできない馬だが、申しわけなさそうに歩く姿もサーラスの一つの出し物として見せようとしていると思つたから。

イ とても芸ができるように思えない馬を見物席に引つ張り出して、みんなの前で芸を教えようとしていると思つたから。ウ サーカスに連れてきて何もせずに食べさせておくのはもつたいないから、あわれな馬をわざわざ見せ物にしようとしていると思つたから。

エ 今はまだ芸はできないのに、サーラス団の一員である馬をみんなに覚えてもらうために引つ張り出してきたと思つたから。

●直後の文に注目する。

問三 線③「周囲の人は皆、目を見張つた」とありますが、それはどのように思つたからですか。文中の言葉を用いて、十五字以内で書きなさい。

●直後の文に注目する。

(例) 馬が勢いよく駆けだす様子。

長年鍛え抜いた巧みな曲芸

完

ウ

●馬が見せ始めたものである。

問五 線⑤「一生懸命手をたたいている自分」とありますが、このときの「僕」の気持ちの説明として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

ア 馬のすばらしさをたたえながら自分にも希望を感じてゐる。

イ 馬が失敗することなく芸をやり終えたことに安心してゐる。

ウ 馬の曲芸を見て、自分もサーラスに入りたいとあこがれている。

エ 馬が思つてもいなかつたほど早く走ることに感動してゐる。

ア

問六 線「思い違い」とあります、どのように思つていたのが、実際はどうだったのですか。文中の言葉を用いて、四十字以内で書きなさい。

(例) 見せ物に直面する。

た	見
馬	せ
が	物
、	に
実	す
際	る
は	よ
サ	う
一	ん
カ	ち
ス	き
一	よ
座	く
の	け
花	だ
形	た
だ	巧
つ	み
た	な
。	曲
。	芸

難

●「僕」は最初「なにもあんなになつた馬を見せ物にしなくたつていいじゃないか」と思つてゐる。

次の文章を読んで、問い合わせに答えなさい。

舶來品をやたらに重宝がる日本人の氣質に反して、^①なぜ椅子だけが歴史的に定着してこなかつたのか。中國經由で渡來した異國の珍品たちは、「唐物」と言つて今なお茶の湯の世界では最高級品としての格式を与えられている。しかしながら椅子に関してだけは、かつてそれが渡來していた痕跡すらも忘れ去られているよう感がある。

理由はいろいろと考えられる。まず椅子やテーブルは、狭い日本家屋の中ではやたらに場所をとる。一つの部屋で食事もし、書も綴り、茶を点てては、寝室としても用いるという日本家屋の合理的な特性からすると、椅子やテーブルが大きく場所を占めていると部屋の用途が制限されてしまつて具合が悪い。これは現代人の住宅事情と照らし合わせても十分納得のいくことだろう。

あるいは家をこしらえるとき、現代人の常識ならばまず箱をつくり、内装を施し、家具を選んで椅子を決める、というのが順当なところだろう。 日本家屋のつくりというのは^②これとはまつたく逆で、まず「坐る」ということからすべてが出発する。畳のモジュールや天井の高さ、梁や長押の位置や寸法、あるいは障子や襖の開け閉めの作法から「手掛けかり」の位置まで、日本家屋の空間は、「坐の視点」を基準にすべてが秩序立てられている。

かつて筆者が京都の竜安寺を訪れたときのことである。ある外国人旅行者が二階から見るような視線から「石庭」を見んではバチバチとシャッターを切つて「ファンタスティック（すばらしい）！」と言つて悦んでいる。^③おせつかいとは思つても、「まあこつちへ来てゆつくり坐つてご覧なさいよ。別の世界がみえますよ」と誘つてみた。日本文化のファンであるらしい背の高い金髪の青年は、筆者の傍らでしばらく庭を鑑賞しながら何を思ったのか、「これは私たちの文化にはない世界との関わり方です！」と目をまん丸く見開いて訴えていた。

そもそも家というものは、そこに棲まう人々の物の見方や感じ方を根本的なところで育てる役割を果たしていく、たとえば高い目線から庭を見下ろすと、その全体像を把握するのには都合がいい。しかし、庭を構成する石の存在感や空間の奥行き、そこに流れる空気の質感までも味わおうとするのであれば、庭の片隅に坐つてその空間に身を委ねてしまうのがいい。ことに風雅な日本の芸術家たちにとつて、「造化の妙」というのは至高の価値をもつていて、家の意匠にも外界の自然と親しく交わり、自然を上手にとり入れるために努力がさまざま形で払われてきた。室内と庭とを隔てない縁側の意匠はその最たるもので、家に居ながらにして自然を体感できる装置にもなっている。あるいは、部屋の奥から外を眺めたとき、床と柱と長押とに縁取られた縁側の空間が、外の世界を絵画のように切り取つてはまた別の世界を見せる。朝早い時間などは陽射しが逆光となつて草木が眩しいほどのハレーーションを起こし、強い光に包まれた空間世界はあたかも映画のように住む者の身体を包み込む。

^④この詩的な空間に人間の入り込む余地があるとすれば、その姿勢は必ず床坐でなければならない。日本家屋に込められた諸々の意匠や空間スケールのバランスは、かつて日本人が事物の鑑賞に際して立つて行うという作法をもたなかつたことを如実に物語つていて、その緻密に計算された空間の調和は、不作法に突つ立つていられたならば、まるで台無しになつてしまふ。

(矢田部英正「椅子と日本人のからだ」より)

(注) モジユール——寸法。 長押——和風建築で、柱と柱の間にわたす横木。 手掛けかり——手をかける所。
造化の妙——自然の美。 至高——この上もなくすぐれていること。 意匠——デザイン。
ハレーーション——強い光が当たつた部分のまわりが白くぼやける現象。

やや難(やや難)

問一

——線①「なぜ椅子だけが歴史的に定着してこなかつたのか」とあります、その理由をまとめた次の文の A.

● 椅子は、日本家屋のAという空間に合わないから。
● 第二・三段落に注
目する。

(例)	B	坐	る	こ	と	を	基	準	に	秩	序	立	て	ら	れ	て	い	る	A
(例)	B	坐	る	こ	と	を	基	準	に	秩	序	立	て	ら	れ	て	い	る	A
(例)	B	坐	る	こ	と	を	基	準	に	秩	序	立	て	ら	れ	て	い	る	A
(例)	B	坐	る	こ	と	を	基	準	に	秩	序	立	て	ら	れ	て	い	る	A
(例)	B	坐	る	こ	と	を	基	準	に	秩	序	立	て	ら	れ	て	い	る	A

問二

——線②「なぜ椅子だけが歴史的に定着してこなかつたのか」とあります、その理由をまとめた次の文の A.

● ア だから イ ところが ウ サラに エ または エ どちら選びなさい。
● 判断する。

問三

——線②「これ」がさしている部分を、「しという方法。」につながるように、文中から二十六字で探し、初めと終わりの五字を書きなさい。

● 直後の「逆で、まず『坐る』ということからすべてが出发する」をヒントに、これと逆の部分を探す。

問四

——線③「おせつかいとは思いつとも誘つてみた」とあります、筆者がこのような行動をした理由として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

ア 石庭の全体像をもつとゆつくり把握してほしいと思つたから。
イ 立つたまま写真を撮る不作法をたしなめたいと思つたから。
ウ 日本文化を深く理解している姿がとても好ましいと思つたから。
エ 石庭がもつ本来のすばらしさを実感してほしいと思つたから。

● 線④「この詩的な空間に人間の入り込む余地があるとすれば、その姿勢は必ず床坐でなければならない」とあります、それが、「床坐でなければならない」理由を述べた次の文の にあてはまる言葉を、文中の言葉を用いて、十字以内で書きなさい。

● 事物の鑑賞に際して「立つて行うという作法」をもたない日本人がつくつた空間を味わうためには、その空間に こどが最もふさわしいから。

● 第五段落の二文目に注目する。

(例)	坐	つ	て	身	を	委	ね	る
(例)	坐	つ	て	身	を	委	ね	る
(例)	坐	つ	て	身	を	委	ね	る
(例)	坐	つ	て	身	を	委	ね	る
(例)	坐	つ	て	身	を	委	ね	る

工